

## 第82回 記者懇談会実施概要

1 日時 2012年4月18日(水) 15:00～17:00

2 場所 関西大学100周年記念会館 第2会議室

### 3 内容

#### (1) 研究発表・質疑応答(15:00～16:00)

・宮本京子 商学部准教授

発表テーマ「財務諸表の監査における不正への対処」

・上村稔大 システム理工学部教授

発表テーマ「確率過程論、特に飛躍型マルコフ過程論の研究」

#### (2) 学内状況説明・情報交換(16:00～17:00)

本学教授の「平成24年度科学技術分野の文部科学大臣表彰」の受賞について [資料1](#)

障がいのある学生に対する修学支援について [資料2](#)

バンコクオフィス開所式の挙行について [資料3](#)

平成23年度学部における留学プログラムの実施状況について [資料4](#)

海外大学との連携協定締結について [資料5](#)

キャリアセンター主催国際インターンシッププログラムおよび

グローバルキャリアプログラムの実施について [資料6](#)

平成24年度寄附講座・連携講座について [資料7](#)

関西大学博物館平成24年度企画展の開催について [資料8](#)

平成24年度教育後援会総会・学部別教育懇談会の開催について [資料9](#)

関大生の活躍について [資料10](#)

### 4 大学側出席者

楠見晴重学長、黒田勇副学長、本西泰三学長補佐、

宮本京子商学部准教授、上村稔大システム理工学部教授、

横山博行広報室長、中川雄弘広報課長、藪田和広学長課長 他

### 5 参考資料

(1) 関西大学通信 第412号、第413号

(2) 関西大学環境報告書データブック2011

(3) 学生センター講演会 チラシ

(4) 関大スポーツ 平成24年度春～夏スケジュール

(5) 行事予定表(4月～5月)

以上

# 財務諸表の監査における不正への対処

商学部准教授 宮本京子

## 【概要】

近年、上場企業において、例えば業績へのプレッシャーにつながる企業風土などが原因と考えられる不正行為など、粉飾事例が依然として続発している。これらの事件発覚の発端は、後任人事に伴う調査や社内外からの通報、行政機関の捜査など監査人の指摘以外によることも多い。このこと自体が、監査が適切に実施されなかったことを必ずしも示すものではない。すなわち、監査人が不正を発見できるかどうかは、不正の巧妙さや改ざんの頻度と程度などに依存し、不正が共謀により巧妙に仕組まれた場合には、監査手続が有効でないことがあり得るからである。しかし、不正による重要な虚偽表示を財務諸表の監査の枠内で発見することは、監査の主目標の1つである。また、不正のもつ特性から、監査人は常に職業的専門家としての懐疑心を持って監査を行う責任があり、経営者や従業員など広範囲の不正に対処する役割が社会から求められている。

財務諸表監査において、不正リスクを識別、評価し、そのリスクに応じて適切な監査手続を決定することは、監査人の重要な判断事項である。しかし、当該リスクの有効な識別・評価の方法は解明されているとはいえず、また、評価したリスクにいかに対応するのかについての監査判断は、わが国ではどちらかといえばブラック・ボックスとなっている。

欧米の様々な実証研究では、不正リスク要因の識別力の問題や、不正リスク要因の識別方法の問題性が指摘され、不正を発見できるかどうかのパフォーマンスを改善できる可能性が模索されている。しかしながら、個々の不正リスク要因に対する評価をどのように全体としての不正リスク評価に繋げ、対応するのかは解明されているとはいえない。

さて、不正による重要な虚偽表示が行われる場合に通常みられる3つの条件として、(i) 不正を行う動機・プレッシャーの存在、(ii) 不正を行う機会の存在、および(iii) 不正を容認する姿勢や不正行為の正当化の存在がある。これらは不正のトライアングルと俗称されており、監査人はこれらに着目して監査を実施することを求められている。

不正リスクの評価は外的基準がなく直接測定できない概念であるが、これらの3条件に焦点を置き、不正リスクの評価を定式化する特徴を捉え、監査人の判断形成を客観化し改善する手がかりを得ることを目指した。すなわち、わが国の監査人の実務判断という観測された現象に基づき、監査判断過程を数量化して解明し、不正リスク評価の判断過程を標準化してフレームワークを示した。これにより、単に個々の不正リスク要因を識別し、リスクの大小を評価するだけでなく、現実の不正リスクの評価を精緻化できることを提起した。

## 【プロフィール】

神戸大学経営学部卒業。同大学院経営学研究科博士課程修了。経営学博士(神戸大学)。上智大学経済学部専任講師、准教授を経て、2010年より関西大学商学部准教授。専門は、監査論。著書は、『監査契約リスクの評価』(単著、内藤文雄監修、中央経済社、2005年)。主な論文に、「不正リスクの評価にかかる監査人の判断形成」(『現代監査』、2009年)、「財務諸表の監査における不正への対処」(『企業会計』、2011年)など。分担執筆に、『国際監査基準の完全解説』(内藤・松本・林編著、中央経済社、2010年)、『まなびの入門監査論第2版』(盛田・百合野・朴編著、中央経済社、2012年)など。

# 確率過程論，特に飛躍型マルコフ過程論の研究

システム理工学部教授 上村稔大

## 概要

ここ 20 年の間に急速に広まった金融工学あるいは数理ファイナンスの理論，その中でも特に確率解析の理論（経済界などでは，伊藤理論とよぶ）は，実務界では，リーマンショック以降尻すぼみとなったように評価されているようであるが，実はそうではなく，より専門的に，より拡がりをもって進展している。

大元の理論は，株やその派生商品の価格が時間と共に連続的に動く‘確率過程’，いわゆる，Brown 運動（正確には，幾何 Brown 運動）に基づいた解析を主としていたが，近年はそれが飛躍（ジャンプ）をもつような，より一般の確率過程，特に飛躍型マルコフ過程に基づいた理論展開が急速に進展している。私が専門とする分野の一つとして，飛躍をもつマルコフ過程（時間と共に変化する株価の動きを表すものと解釈できる）が，ターゲットとなる価格（あるいは値）に初めて到達するのはいつなのか，あるいは，そもそも到達することがあるのか等，より詳しい確率過程の挙動について分析する研究がある。

デフォルトが起きるか起きないかの分析は，ある意味で株価がある値，たとえば，無限大（ $\infty$ ）などの値に到達することがあるかどうかをみることだと理解すると，爆発することがあるのか，ある場合は，どの程度の割合（確率）でか，と言う問題にすり替わる。これは，まさに‘爆発問題’である。また，そのようなことが起きたときに，何が生じるか。例えば，（債務者に）どの程度の支払い義務が生じるか等の問題を考えることに行き着く。そのような問題を数学的な枠組みを用いて分析している。将来的には，このことに基づいて，統計データとの比較を行い，具体事例の理論的な裏付けを行えればと思っている。

## 【プロフィール】

1967年熊本県生まれ。関西大学システム理工学部教授。専門は，確率論，確率解析学。佐賀大学理工学部卒業，大阪大学大学院基礎工学研究科博士課程後期数理系専攻修了。神戸商科大学商経学部（助手・講師・助教授），兵庫県立大学経営学部（准教授）を経て，2009年4月関西大学着任。2010年4月より，現職。2010年9月，「第4回国際会議：確率解析とその応用（4<sup>th</sup> ICSSA）」（関西大学にて開催）の実行委員長を務める。趣味は，音楽鑑賞。